

第9回 高浜市こども貧困対策会議 議事録要旨

日 時：令和3年7月27日（火）

15：00～17：00

場 所：高浜市いきいき広場
いきいきホール

次 第

※ 開会

※ 委員紹介（資料1）

※ 議事

1. 会長、副会長の選任

2. 第7・8回会議の議論を踏まえた対応（資料2）

(1) 評価指標の見直しについて

(2) 進路決定支援について

(3) 進路状況調査の結果について

(参考) 学習等支援事業を利用する外国にルーツを持つ子どもたちの現状及び対応状況について。

資料2記載の事項について、それぞれ意見交換がされた。主な発言の内容は、以下のとおり。

- キャリア支援に参加した子どもたちの声は後にあるのか？
- 後からNPO法人アスクネットより説明がある。
- 学習等支援事業を利用している中高生を対象としたインターンシップ等で職場を体験できると良い。

高浜市の特徴として地域の人との関係を作り、その中で大人たちの姿から働くということ、地域の中で生活していくことはどういうことかロールモデルを作っていくことが大事である。

ステップの中で働く大人と接する、そして働いてみて自分の力、役割、やれることを考えていける場があると良い。

- 検討されていることがあれば話して欲しい。
- 今年度進路決定支援のキャリア講座、キャリアカウンセリング講座に加え

てインターンシップも計画している。

- 高校生は自己の振り返り等、内省していく形で講座を構成することが多かった。徐々に社会や地域との接点を地域の皆さんにご協力いただきながら外部に出ていくということを少しずつ増やしてきた。

2、3年前までは鬼みち祭りボランティア等、地域との関りが多かった。昨年度はキャリア講座を聞いたある生徒からインターンシップに行きたいという話が上がっていたが、コロナ禍で事業者の対応が難しく実施に至らなかった。今年度は、高校生数人が、夏休みに地域の方に協力いただいてインターンシップの実施を計画している。

- 進路状況調査は、単なる学習支援にとどまらず最終的にどこまで見るのが重要で、高校等の中退しても就労的に自立してくれればゴールになる。自立して、経済的、精神的自立ができれば貧困の連鎖から脱出できる。そこまで執念をもって調査していくことに意味がある。

各市町村の学習支援ではそこまで目を配らせているところはほとんどない。キャリアカウンセリングからインターンシップをつなげていく一つの事例としては、キャリアカウンセリングをする一方で、学校で実習をたくさんやっている。インターンシップの様な経験がたくさんあり、逆にそれが進路を惑わす状態を作っている。もう一度自分の進路を振り返る意味で、この夏、新しくインターンシップを実施することになっている。その生徒の進路希望とインターンシップをつないでいくということで流れを作っている。

- インターンシップについて計画されているということで、その成果も含めて話をしてください。
- 進路決定支援という言い方が青年層のキャリア形成、高校卒業時に決定というのは実態に合わない。働き始めからその仕事が自分に合うかは探りつつ転職を重ねて30代までに固まっていくというのがほぼ一般化してきていると思うので、決めなくてはいけないゴールというものをあまり設定しすぎないほうが良い。

先ほどアフターケアのことが出てきたが20、30代まではフォローアップを考えられるような視野を持っていたほうがよい。

それはどれだけのフォローアップができるかわかりませんが高浜市の取り組みにかかわった子どもたちや青年たちにもその後の継続調査をしてい

ただけるとより良いデータが出るため検討いただきたい。

- この事業の目的としては子どもの貧困対策、貧困の連鎖防止であり、学習支援事業にどれだけの人が参加したか、何日開いたかではなく子どもたちが勉強していくことで社会的自立ができたかどうかというところが成果につながっていく。

そういった意味では、社会的自立を図るためには高校卒業すると就職に有利であり、ここが一番目指すところである。そういう意味では、今回（１）で高校卒業して進学した人が３名、高校卒業後就職した方が１２名いるということでこの事業の成果が７年目を迎えて見えてきたと感じた。

その一方で（２）（３）のアンダーラインが引いてある未決定の人が１人いて、不就労の人がいるところでは、こういった方の対応支援を今後どうしていくのかということが次の考えていく点になると感じた。

- ３３名中２名のこうした存在に光をあてて、どういう経緯でこうなっているか、どういう支援が必要なのかということは今の話のとおりとても大切なことだと思う。補足はありますか。

- （２）の不就労の１人は、高校３年在籍中に就職する予定であるということまではつかんでいるのですが、そのあとの調査で返答が得られなくなった。

（３）については、実際、不就労になった後もステップに支援員見習という形で顔を出していたが、今は着信拒否になってしまった。今後とも根気強く連絡を取っていききたい。

- 若者が自立していくプロセスは、今の現代社会では難儀な話で、本来ならば２０代中盤まで見ていきたいがそれも大変なことで３３名可視化ができている。うち２名未決定不就労がいて、これは我々のプログラムの良くしていきたい部分の１つである。逆に進学３名もまだわからない。中退するかもしれない。就職するときうまくいかないことも考えられる。少なくとも就職して社会的自立をして、厚生労働省が３年間離職率を計測しているため３年間くらいを目安にして考え、どこかで数字を決めておかないといけない。彼らのフォローアップをする際に決まっていなくて数字を追えなくなってしまい、うまくいったかかっていないかわからなくなってしまふ。また、この会議の中で議論しても良いと思う。

- 大学生や専門学校に進学したというのは、1つの達成であるのですが、貧困家庭の子どもたちのリスクは非常に高い。特に奨学金を借りている子どもの場合、高い奨学金を返さなくてはならない、だから無事学校を卒業したとしても数百万の借金を背負って社会に出ていくことになる。中退した場合は借金だけ残って非常に厳しい中で社会に放り出されることになる。

大学専門学校卒業後に少し落ち着いたほうが良いのではないかと思ったときに、困ったときに相談できる大人が複数いるということがとても大切である。家族あるいは親族だけで支えあうのは非常にリスクが高い。困ったときに助けてもらえるネットワークをひとりひとりが持つという、そうしたことを是非それがどのような指標で測れるか分からないが社会関係をどのように形成していくかということも1つの視野として検討いただきたいと思う。

もう一つの重要な論点が外国にルーツを持つ子どもたちの問題がある。ご報告にあったとおり不登校の割合が分かる。小学校 9.3%位一般校は 3%より低く、中学生 8.3%で一般校は 3%位である。

外国にルーツを持つ 18 歳以下人口が 742 人そのうち小中 317 人ですから 400 人くらいが小中校に在籍していないことになる、この中で高校生がどれくらいか分からない。

この貧困対策は在籍している人たちだけを見ていればよいというものではない。学校に繋がっていない子どもたちどうなっているのかそういった視点も持つておく必要がある。

- もしそうだと高校や専修学校というような教育に接している 18 歳未満人口はどれくらいかわかるでしょうか。つかみにくいとは思いますが。
- 小中学生等の義務教育に関してはある程度把握しているが、高校生は把握が難しい。
- 小中学生では在籍率はどのくらいか？
- 現在把握できておりません。
- 18 未満人口で出されているので計算すれば出てくるであろうと思いますが、そういう学校に在籍していない人たちをどのように把握し、ニーズにどうアプローチしていくべきか今後考えていく必要がある。

3. 令和2年度子ども健全育成支援員の活動実績（資料3）

資料3記載の事項について、それぞれ意見交換がされた。主な発言の内容は、以下のとおり。

- P5の最後に囲ってあるコメントがあるが、コロナ禍の中で夕食支援は、やり方を変えて行っている。2年前は「あっぽ」という高齢者施設を使用して行っていたが、学習等支援事業の子どもたちも参加し、また、卒業した生徒の兄弟姉妹も顔を出す。施設のお年寄りもいて色々な人間が集まって月2回色々な交流ができた。入所者の年寄りと一緒に歌を歌ったりして、生活態度ががらりと変わった子もいる。今回コロナの影響で使えなくなった。昼のうちにきちんと食事を作って届けてやろうと考えている。子どもと話をすることがあったが、「今は、食事は大体一人で食べている。」「あっぽでみんなであれがやりたい。」と言っている。歌が歌えてゲームができてなんでも出来る場所だった。その環境に近い場所をまち協みたいな場所で先生達とも相談して考えていきたいと思っている。高浜の第7次の計画に加えて欲しいと伝えている。
- こども食堂については、今までそうした指標をもっていなかったのですが、どのような成果が上がっているか客観的に図っていくことができていませんが、今の話を聞くと居場所として機能していたことが分かります。今後はそうした学習支援だけでなく、こども食堂の成果も分かるように、客観的に図る方法を検討して欲しい。
- 高浜の学習支援は特徴的というか、先進的にやっていることとして、箕浦さん、佐々木さん達子ども健全育成支援員がきめ細かく問題点を拾いながら活動していること。他市の議員さんが視察に来ると感服して帰られる。学校現場との連携がすごく難しい。高浜では当たり前で連携出来ているが、他市ではこれが不思議なくらいなかなかできない。それができていること。キーワードにある居場所というものがある。参加した人はわかると思うが、子どもたちは最初なかなか情緒不安定な子が多く、愛着障がいの子が多くずっとしゃべり続けてくる。かまってかまってみたい状態をずっとやってきて結構それをいろんな人たちが受け止めてくれる。そうすることでだんだん落ち着いてくると人の話を聞くようになる。これはやっぱり居場所感がある。
様々な人たちがここの場にかかわって受け止めてくれている結果である。

本当にコロナでそういったものが試された期間が続いている。南部まち協がお弁当を届けていただいたり、いろんな活動をやっていただいたりすることで、人と人の関連性が途絶えることは無くなることのないところに感動を覚える。

数字で評価できるところと、その評価に税金を使って実施するというところで厳しい面もある。こども食堂を併設することで良いことがあるという部分にスポットを充てるという意味でこども食堂の評価があっても良いかと思う。

- P5の下の四角の3行目の中高卒業後の多様なかわり方を求めるとは、どのようなことをイメージしているのか。
- 高校3年生までが対象になるが、それを超えてもチャレンジサポーター見習いという形で顔を出すことも可能にしている。また就学援助受給者は小中学校しかない。就学援助世帯として高校生は事業対象ではないが、お金にはきっと苦勞するから来ても良いよと柔軟性を持たせて顔を出してくれる子を大事にしている。
- そうすると柔軟的に支援を継続していくという意味合いでよろしいですか。
- はい。
- 学習支援の件で支援してもらう子どもたちが中心にされていますが、私は、数回食事の支援で入ったことがあり、その時に学習支援でサポートしている大学生の人たちがどう思っているのか食事をしながら話を聞いている。ボランティアを学校のほうでしなさいとか指示出ているのか。学校としてはすると良い程度なのか。どのような評価をするのか。友達同士の会話の中でそういうことやっているから来てみないかなど進んで支援をしていただける学生の子たちにもう少し我々社会人が、良いことをやっているということを言っただけたり評価してあげたり、もっと良い取り組みができるのではないか。
- チャレンジサポーターの方に年1回表彰し、感謝状を渡している。大学生の方がこの活動を通してどう思っているのかですが、昨年度できなかった感謝状授与式を今年の頭にやりましたが、この中でこの4月から教員になる学生が、「この経験がなければ教員として学校にいざ出るときに、貧困や生保や母子父子家庭がいることは分からなかった。大学の教育課程では勉強がで

きないものだが、この学習支援事業を通して福祉の分野の経験をすることによってすごく自分のためになった。」と言っていた。

○ 生徒だけでなく学校にも働きかけて生徒を出していただけたらと思う。弱い人達もいる中でサポートするということや学校の勉強で習わないようないろんなことを学んでいけると思う。

○ 私の知っている学生は大学で学習支援に参加し、その後小牧市や豊田市の職員になり学習支援を担当している人もいる。高浜市のボランティアの経験がその後の自分たちの仕事に生きていることは感じる。

大学では地域の中で学生が育つことを大事にしている、こうしたボランティア活動を単位化しており、1～3年でどこかに出かけていき学ぶということを見せていただいている。

○ 学生さんが見学に来ていただいたことがあったが、違う市の学習支援をやっていた人がいた。大学によっては積極的にやったら良いという大学は増えた。推奨はされているが、単位まで出せているところは少ない。

○ 単位化も結構進んでいる。私学の大学でも地域で学生が育つのを大事にしてきているし、学生も地域に出たいという要求が強いと思う。今、私の授業でも児童館で実習をしているが、みんな非常にうれしそうに実践させていただいている。そういった面ではやはり受け入れができていると思う。

4. 令和2年度「ステップ」「ステップ・ジュニア」の活動実績（資料4）

資料4記載の事項について、それぞれ意見交換がされた。主な発言の内容は、以下のとおり。

- P13に利用者の保護者の方のアンケートがあり、「今度はサポーターとしてステップに恩返ししてくれることを願っています。」と意見があるが、ここで育った子たちがまたサポーターとして戻ってきてくれると社会的自立の一つかとうれしく思う。サポーターとして戻ってきてくれた方が何人くらいいるのか。
- 現状ですと、サポーターとして活動している人は自立したり、再度行ったりしていて正確ではないですが10名弱くらい活動している。参加率の高い学生や社会人も2,3名います。あとはたまに顔を出してくれる形になっている。
- 位置づけはサポーターになるのか？
- サポーター活動として現場に入ってもらっている。
- 基本的なところでステップ及びステップ・ジュニアの参加者の中の外国にルーツを持つ者の割合は分かるか。
- 資料2参考にある。学習支援の中で10人20.4%で、内訳は高校生1人中学生5人小学生4人である。
- 日本語学習をやっているのか。
- 昨年度はステップ・ジュニアの中で日本語がかなり困難なケースがあった。
- これまでよりも日本語の理解が十分でない子どもが2名程度参加していたが、特段日本語の指導に力を入れて行ってはいない。基本的には宿題で分からない部分の日本語について説明をしたり、日本語が少しできるので通訳をしてもらったり、絵を示しながらやったり、通訳機を使用してみたり宿題のサポートを行った。
- 日本語学習を系統的にやる必要はないということか。
- 昨年度参加した2人については日本語の理解が十分でなかった。本人が日本語の理解を必要としていない、日本語を覚える必要性を十分に感じていなかったため、こちらが教えようとしても飲み込めない状況があり特段急いではなかった。

○ おそらく日本における学習支援において外国にルーツを持つ子ども達を課題化してみていく必要があるだろうと思う。

特に高浜市は住民の中での割合が非常に高い市ですので、そこでどのような支援が必要とされているか、先ほども少し言ったように在籍していない子どもたちもいるのでそういった子どもたちも含めて日本語学習をどのようにサポートしていくのかということがおそらく必要になってくるのかと思う。実際その他の市に行くと会話は大体できるが読み書きが難しい学習言語として日本語が定着していない。そのことが将来にわたって進学就職の問題に影響してきて貧困の連鎖に繋がっていく恐れがある。10～20年後にそういう問題が表れてくる今から人数を補足していき、どのような支援が必要なのかということを経験と連携をとってやっていく必要がある。

○ 7月20日に多文化共生コミュニティセンターが開所した。言語、年齢問わず勉強ができる子どもの夏休みの宿題を一緒に取り組むとか行政上の書類の書き方など相談できる。

○ 専門の施設ができるのはとても素晴らしい、ぜひ周知して行って欲しい。

○ 外国籍の本当に悩ましいことがありまして、他の地域でも外国人が多いところでは、多文化共生の話にしましても、学校での対応も難しい。教育の側からも住人に対するサービスの提供側からも学習支援の中にもかなりの確率でこの問題が同時に発生してくるということがある。諸外国、特にアメリカの貧困問題では、移民と貧困がものすごく直結しているので、相当に英語教育を徹底して実施している。そうすると生産性が上がり、自頭が良いが読めないから成績が悪いのが防げる。数学の成績を見るとわかる、数学はさっさと解けるが、国語とか社会は日本語が読めないから点数が取れない。こういう事を早くつぶせると効果が上がることは事実として分かっている。またデータとしても分かっている。ただ、それを誰がやるのか、という問題が出てくる。日本語教室を設置するわけにもいかないし、そんな予算もとれない、しかも福祉行政だからそこまでやるのかということになる。こういう業務はなかなか難しい。今はオンラインで学習支援をやっている起業家がいる。彼とこういうニーズがあるという話をした。オンラインだから世界中にいる。ブラジルで日本語を教えているブラジル人がそこにいたりするんです。そういう人に高浜もそういう人たちを支援することをオンラインならできるの

で、こういうのは面白いと思う。すぐにやろう言う話ではないが。何らかのアイデアが出ると面白いと思い解決策を探している。

※ その他

(1) こども食堂支援基金の収支状況報告（資料5）

特になし